

# 世代の違いによる顔文字の感情認識効果

## Effect of emotion recognition due to the use of face marks on different generations

竹原卓真<sup>1)</sup>

Takuma TAKEHARA<sup>1)</sup>

E-mail: takehara@hokusei.ac.jp

### 和文要旨

近年、電子メールに代表される、非対面型コミュニケーションを利用する機会が、飛躍的に増加している。電子メールで使用されるコミュニケーションツールに顔文字があり、顔文字にはメッセージ自体が内包する感情を促進したり、抑制したりする効果が存在することが、様々な研究から明らかになっている。一方、若者世代と年長者世代との間には、デジタルディバイドが存在すると報じられているが、世代の違いによる顔文字の心理学的効果については、未だに報告がない。そこで、本研究では、電子メールコミュニケーションにおける世代間の感情認識効果を検証するために、若者世代として大学生、年長者世代として彼らの両親を対象として、喜び・悲しみ・怒りの電子メールメッセージに、それに対応する感情を表現する顔文字を付加して、感情認識度評価を行わせた。その結果、喜び・悲しみ・怒りの3感情を表現する電子メールにおいて、顔文字を付加すると世代にかかわらず、感情認識促進効果が生じることが明らかとなった。また、父親の感情認識度が低いことも明確になった。これらの結果は、文化や文脈による表情認知研究の結果から説明できるかもしれない。

キーワード：世代、顔文字、感情認識、促進効果

Key Words : Generation, Face marks, Emotion recognition, Facilitation effect

### 1. はじめに

1800年代後半、モールス符号による電信網が急速な発展を遂げ、それに乗じるかのように、1867年にグラハム・ベルによって電話が開発された。その技術は瞬く間に全世界に広がり、わが国においても、1890年に東京などで電話サービスが開始された。それまでは、遠隔地の人とコミュニケーションをとる手段は手紙に限定されていたが、電話の普及によって、遠隔地の人と手軽かつ瞬時に、しかも言語的コミュニケーションを取ることが可能になり、まさに電話は対人コミュニケーションを根底から大きく変えたと言っても過言ではない。また、約10年前から、電話の普及は固定電話から携帯電話へと形を変えて進化し続け、近い将来には国民皆電話時代が到来するかもしれない。

一方、電話の開発から約100年後の1969年、アメリカで軍事目的用にコンピュータネットワー

ク(ARPANET)が開発され、現在のインターネットの基礎が構築された。わが国ではコストの問題もあり、コンピュータネットワークは数十年間ほとんど一般家庭に普及しなかったが、1995年のMicrosoft Windows 95の発売がきっかけとなって、コンピュータが一般家庭に流入し、その人気に後押しされるような形でネットワーク網(インターネット)が急速に整備された。2005年時点における日本のインターネット普及率は、企業で99.1%、世帯で87.0%と非常に高く、世代別のインターネット利用率も20~29歳の95.0%をピークに、60~64歳においても55.2%と半数を超えており、高いレベルで推移している[1]。

このように、ネットワーク網が現代社会の日常生活に深く浸透し、さまざまなスタイルの対人コミュニケーションが交わされるようになった。中でも、電話に代わる新しいコミュニケーション手段として広く利用されているものに、電子メール

<sup>1)</sup> 北星学園大学社会福祉学部、Faculty of Social Welfare, Hokusei Gakuen University